

越喜来地区



東日本大震災発生時、低地にあった越喜来小学校の子どもたちは、校舎と高台をつなぐ非常階段を使って全員無事に避難することができました。その後、平成28年に高台に新校舎が建設されました。

越喜来地区でも、防災集団移転促進事業や災害公営住宅整備事業による高台移転が進められましたが、地区住民の中には、集団移転地に近い自己所有の土地への移転を希望する人もいたことから、市に申し入れを行い、既存集落の中にある未利用地を活用した防災集団移転(差込型)が可能となり、コミュニティを保ちやすい形での高台移転が実現しました。

平成26年からは、低地に残る移転跡地利用等の検討に取り組み、浦浜地区には「ど根性ポプラ広場」や民間企業の「イチゴ農園」、崎浜地区には水産作業場・倉庫、甫嶺地区には小学校跡を活用した、甫嶺復興交流推進センターとBMXスタジオが整備されました。

今後も越喜来を盛り上げていくために、広い年齢層の皆さんで話し合いを継続しています。



にぎわう「ど根性ポプラ広場」



移転した越喜来小と防集団地



BMXコース(旧甫嶺小体育館)



炊き出しによる被災地支援



まちづくりワークショップ



新たなまちづくりが進む

日頃市地区



日頃市地区では、被災直後に町内の組織をまとめて「日頃市町支援隊」を組織しました。地域ごとの炊き出し隊を編成して、おにぎりを日に5百個ほど被災地域に届けていました。最初のうちはシンプルなおにぎりでしたが、そのうちに海苔や塩をつけるなどの工夫をしました。現場では手の込んだおにぎりが好まれ、トラブルになったとの話を聞き、全て統一のおにぎりにした経緯もありました。非常時においては、些細なことも争いの種になるということは大事な教訓となっています。

もともと何かがあった時には助け合うのが当たり前だという風風があり、現在は地区公民館が軸となって、地区の課題を見直していこうと住民ワークショップを開催しています。

また、日頃市地区は、土砂災害のリスクが高い地域です。自主防災組織では、地域の安全に関わる話をする機会を設けています。日頃市地区は、昔から地域のまとまりが強い傾向が見られ、「共助」の気概が培われているようです。



震災の教訓を伝える津波記憶石



新たに開通した三陸沿岸道路



復旧した根白漁港荷捌き場

吉浜地区



吉浜地区は、大正15年〜昭和6年の開田事業により「高台移転」が行われていたため、東日本大震災では犠牲者1人・住戸被害4戸と他地区に比べて被害が少ない地区となりました。こうした経緯を伝承していくために、平成26年に「吉浜奇跡の集落」と刻んだ「吉浜津波記憶石」を建設しました。

被害を受けた浜の防潮堤整備にあたって、地区全体で話し合い、整備方針を取りまとめるなど、地域一丸となって復興に取り組みました。

また、三陸沿岸道路の開通により、これまでの国道45号での移動と比べ、時間短縮やアップダウンの減少、冬場の道路環境も改善されるなど、生活利便性が高まりました。一方で、道路整備により雨水の流量が変わったところもあり、それに対応した排水対策が新たな課題となっています。

温暖な気候や津波被害への安全性の高さに加え、交通便利性が高まったことは、将来も住み続ける上で良い影響を与えているようです。

綾里地区



綾里地区は、昭和三陸津波(昭和8年)の復興の際に、山の斜面を造成した「復興地」への集団移転を行いました。

東日本大震災では「復興地」は被害を受けず、高台への集団移転が津波への備えとして有効であることが明らかになりました。

平成23年度に綾里地区復興委員会を立ち上げ、協議を重ねまとめた「第1次提言書」を踏まえて、認定こども園や消防分遣所などの公共施設の再建、防災集団移転・災害公営住宅整備、水産基盤整備などが進められました。あわせて、防潮堤の高さについても多くの議論を重ね、想定される浸水エリアや水産業などへの影響も考慮しながら、防潮堤の高さを決定しました。

さらに、移転後の被災跡地活用として、地区住民が中心となって、あやさとふれあい広場整備の検討を行い、令和2年3月に供用開始となりました。



広場整備に向けたワークショップ



あやさとふれあい公園



完成に向け進む防潮堤工事